

## 現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係

橋 本 令 子\*・内 藤 章 江\*\*

The Relationship between Self-concept and Clothing behavior of  
Women University Students of Today

Reiko HASHIMOTO and Akie NAITO

### 1. 緒 言

自己概念は自己観<sup>1)</sup>とも言われ、自分の顔や体型などの身体的特徴、能力や特技、性格、他者との人間関係などを、どのように考え感じているかをいう。こうした自分の認識は、その人の行動に大きな影響を与える<sup>2)</sup>。

自己概念を形成する手段として、被服や化粧、動作といわれる一連の被服行動があげられる。特に現代の若者は、メディアや雑誌など広告媒体の情報はもとより、友人を含む他者の存在は大きく、必要不可欠な情報源となっており、周囲の人々と自分を比較することで本当の自分を見つけ出そうとしている。自己概念と被服行動との関連については、これまでいくつかの研究<sup>3), 4)</sup>が報告されているが、大学生活を送る4年間に変化する様子を調査した研究は少ない。

そこで本研究は、大学の入口となる1年生と出口となる4年生の女子学生を対象者として取り上げ、現在のありのままの自己を客観視した現実的自己、自分がこうありたいと願う理想的自己と自己の本当の姿や存在を証明するための手段として被服イメージ調査を行い、現代の女子大学生の自己概念と被服との関係を捉えた。さらに現在の自己をどのように認識、理解し将来の自己確立に向けてどのような行動をしているか追究するため被服関心度、アイデンティティ、理想的自己に近づく方法を調査し、検討した。

### 2. 調査方法

#### 2-1 自己概念と被服イメージ調査

自己概念には、現実的自己、理想的自己があり、この違いが新たな行動をおこすといわれる。そこで2つの自己概念について調査を実施した。また自己概念に影響を及ぼす被服

---

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科

\*\* お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター

として、好きな被服と嫌いな被服のイメージ調査も同時に行うこととした。

調査は、自己概念と被服イメージともに同様の評価語を用いて行うため、藤原<sup>5)</sup>が行った研究を参考に33形容詞対(図1)の評定尺度を選定した。評定は7段階尺度とし、現実的自己は現在の自分の様子、理想的自己は将来の自分についての願望、好きな被服、嫌いな被服は、現在自分が所持する被服を想定させた。調査は現実的自己と好きな被服、理想的自己と嫌いな被服を組み合わせ、2度にわけて行った。以後、これらを4概念と記す。調査対象者は相山女学園大学学生、1年生127名、4年生100名である。調査方法は、集合調査法と配票留置法とし、調査期間は2007年6月～7月に行った。

4概念は、形容詞対ごとに左から7～1の得点を与えて学年ごとに平均値を求め、項目間の概念、ならびに学年の差をみるためt検定を行った。また平均値をもとに相関係数を算出し関連性を検討した。ついで現実的自己、理想的自己、好きな被服、嫌いな被服をまとめて、33形容詞対を変数として主因子法による因子分析(バリマックス回転)を行い、基本因子を抽出した。

## 2-2 被服行動と自己理解度の調査

自己概念と被服イメージの結果より、その背景にある特徴を把握するため、被服行動として永野<sup>6)</sup>と神山<sup>7)</sup>が用いた被服行動尺度、被服関心度項目の中から本研究に適合する各15項目と30項目を選定した。また、自己の理解度としてアイデンティティに関する8項目、理想的自己に近づくための方法として4項目設定した。

評定は、被服行動と自己の理解度については片側尺度による5段階評価とし、理想的自己に近づくための方法は該当する項目を選択させた。調査対象者は先と同様であり、1年生96名、4年生86名に対して、2007年11月に集合調査法と配票留置法で行った。解析は質問項目に対し、肯定的回答から5～1の得点を与え、単純集計および因子分析、t検定を行い、被服行動と自己理解度の関係を明らかにし、自己概念との関係を考察した。

## 3. 結果および考察

### 3-1 自己概念と被服イメージ

#### 3-1-1 現実的自己、理想的自己、好きな被服、嫌いな被服による評定平均

現実的自己、理想的自己、好きな被服、嫌いな被服の概念について、形容詞対ごとに調査対象者の評定平均値を算出した。4年生の結果を図1に示す。

各概念ともに肯定的用語の方向から理想的自己、好きな被服、現実的自己、嫌いな被服と並んでいる。特に、評定平均値の差が大きい用語は、「きれいな」「魅力的な」「上品な」「きちんとした」「スタイルがよい」「しゃれた」「明るい」「清潔な」「親しみやすい」「さわやかな」「かわいい」などであり、これらは理想的自己、現実的自己、好きな被服と嫌いな被服との差が大となっていることから、概念により違いがあることがわかる。反対に、評定平均値の差が小さい用語は、「派手な」「個性的な」「進歩的な」「若々しい」「風変わりな」などであり、概念により違いがないことが確かめられた。

次に概念ごとに特徴をみると、現実的自己からは、保守的で平凡であるが明るく親しみやすい人物であると評価し、理想的自己からは、単純ではなく清潔感があり魅力的な人物

# 現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係

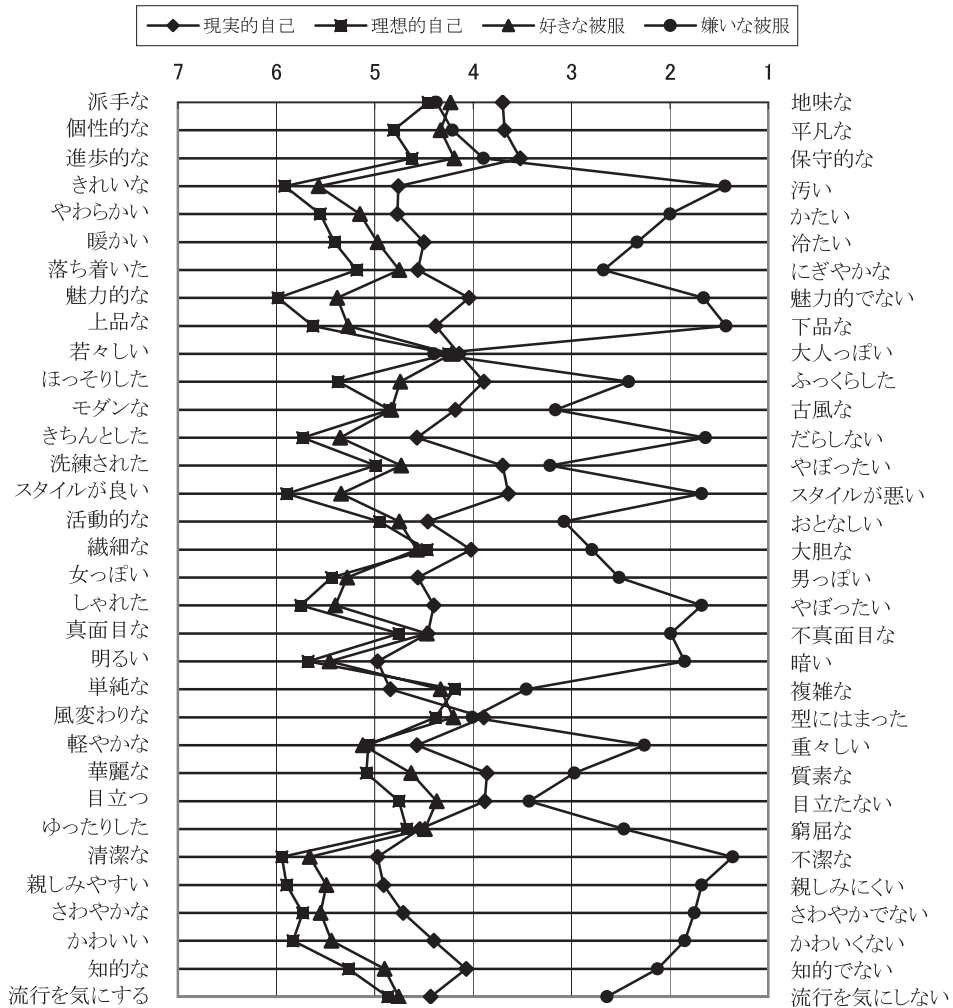


図1 現実的自己・理想的自己・好きな被服・嫌いな被服に対する評定平均値（4年生）

になりたいと願っている。好きな被服は、理想的自己と現実的自己の間に位置し、清潔感があり派手ではなくきちんとした服であり、反対に嫌いな被服は、下品で不潔な服である。

図は省略したが1年生についても4年生と同様に、肯定的用語から理想的自己、好きな被服、現実的自己、嫌いな被服の順に位置した。しかし1年生は4年生に比べ、4概念の評定平均値の差が小さい結果となった。この相違は、就職活動などにより4年生は、自己と社会との接点を強く感じており、概念に対する考え方が明確になってくる傾向が現れたものと考えられる。

次に上述の概念による関連を調べるために、評定平均値をもとに相関係数を算出し、結果を表1に示した。両学年ともに、好きな被服に対し現実的自己と理想的自己に相関が認められ、嫌いな被服との関係は負の相関を示した。また4年生は、現実的自己と理想的自

己についても相関が認められ、各概念の関係がはっきりと示されたかたちとなった。

表1 4概念による相関係数

1年生	現実的自己	理想的自己	好きな被服	嫌いな被服
現実的自己				
理想的自己	0.298			
好きな被服	0.340 <sup>*</sup>	0.939 <sup>**</sup>		
嫌いな被服	-0.397 <sup>*</sup>	-0.829 <sup>**</sup>	-0.821 <sup>**</sup>	

4年生	現実的自己	理想的自己	好きな被服	嫌いな被服
現実的自己				
理想的自己	0.397 <sup>*</sup>			
好きな被服	0.578 <sup>**</sup>	0.947 <sup>**</sup>		
嫌いな被服	-0.583 <sup>**</sup>	-0.864 <sup>**</sup>	-0.888 <sup>**</sup>	

※※1%有意 ※5%有意

### 3-1-2 因子分析構造

33形容詞対を変数とし現実的自己、理想的自己、好きな被服、嫌いな被服の概念をまとめて因子分析を行った。その結果、1年生、4年生ともに固有値1以上で5因子抽出されたが、固有値の低下割合から因子数を4因子と定め、再度解析を行い因子構造を明らかにした。図2において詳細に考察をするため、ここでは因子名のみを記す。

1年生については、第1因子が「清潔な」「上品な」などの用語で構成され、「一般的望ましさ」の因子とした。第2因子は、「華麗な」「流行を気にする」などの用語で構成され「ファッション性」の因子、第3因子は、「個性的な」「風変わりな」などの用語で構成され「個性」の因子、第4因子は、「活動的な」「若々しい」などの用語で構成され「若さ」の因子と命名した。累積寄与率は全分散中の59.76%であった。

4年生については、第1因子が「落ち着いた」「真面目な」などの用語で構成され、「一般的望ましさ」の因子、第2因子は、「明るい」「魅力的な」などの用語で構成され、「魅力」の因子、第3因子は、「洗練された」「華麗な」などの用語で構成され「ファッション・個性」の因子第4因子は、「きれいな」「清潔な」などの用語で構成され「快さ」の因子と名づけた。全体の累積寄与率は63.30%であった。

両者を比較すると、第1因子の「一般的望ましさ」の因子には、同様の用語が9形容詞出現している。しかし、出現順位を調べると1年生は「清潔な」「上品な」「きれいな」の負荷量が高い数値を示し、見た目の美しさや清潔感を重視しているのに対して、4年生は「落ち着いた」「真面目な」「知的な」の負荷量が高い数値を示し、社会から求められる一般的望ましさを重視していると考えられる。第2因子、第3因子は1年生が「ファッション」の因子、「個性」の因子で構成されたが、4年生は「魅力」の因子、「ファッション・個性」の因子となり、個性とファッションに関する評価語が合併された因子となった。また、4年生の「魅力」の因子は、自己の女性らしさを重視していることがわかる。第4因子は、各々「若さ」の因子「快さ」の因子を示した。以上より、1年生は自らの感性に従

い、自分感を表現する因子構造であるのに対し、4年生は外見だけではなく内面からも自らを高める因子構造を持つことが明らかとなった。

### 3-1-3 4 概念の関係

概念ごとに各被験者の平均因子得点を求め、因子空間に布置した。図2に示す。

1年生は、「一般的望ましさ」「ファッション性」の因子において、理想的自己が正方向に布置しており、高く評価されている。ここでは現実的自己は原点付近に付置しており、現在の自分の評価を一般的望ましさとファッション性のどちらにも偏りがなく、中位であると考えている人が多いことがわかる。また理想的自己と現実的自己の差が大きいことから、現在の自分のファッション性を低く評価し、よりおしゃれで個性ある人物を理想的自己として目指している様子がうかがえる。さらに2つの自己の間には、好きな被服が布置していることから、被服着用により理想としている自己に近づこうとする様子が推察される。そして、負方向に布置する嫌いな被服は、評価が低く心理的に望ましくない被服とし

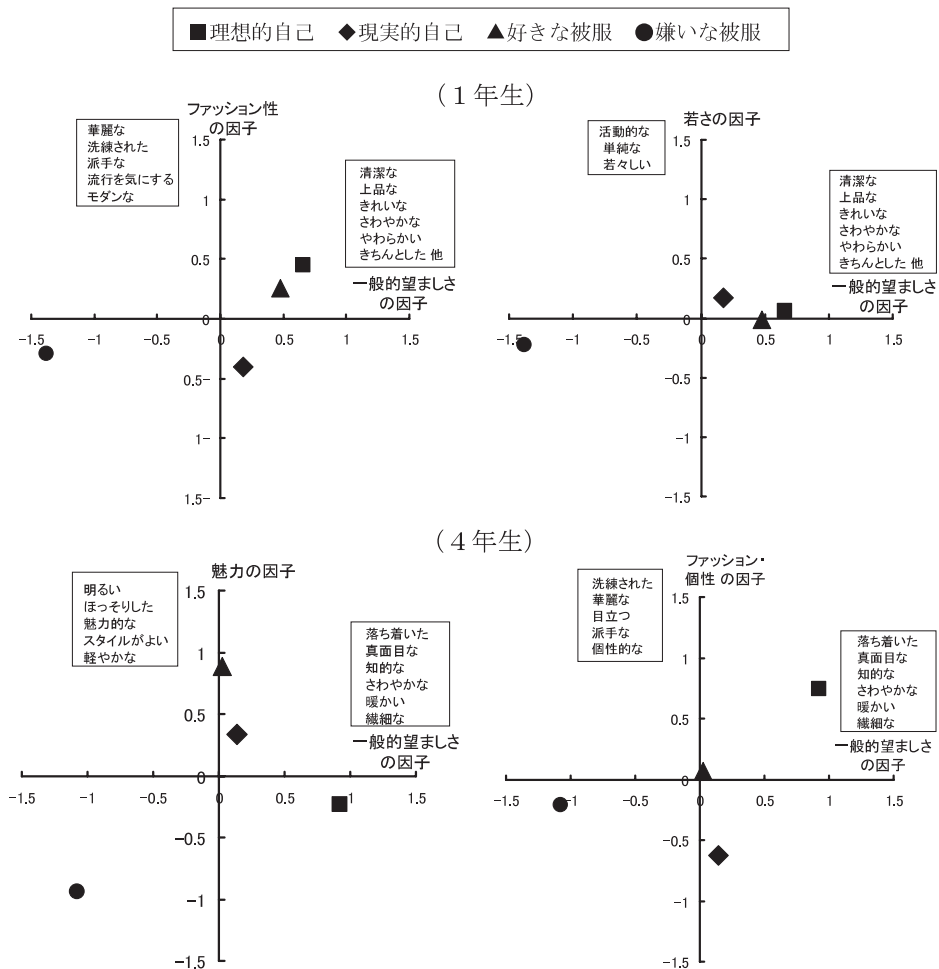


図2 理想的自己・現実的自己・好きな被服・嫌いな被服による空間付置

ていることがわかる。

「一般的望ましさ」「若さ」の因子においては、理想的自己、好きな被服、現実的自己は、正方向の非常に近い点に布置している。ここでは「若さ」の因子が、理想的自己よりも現実的自己の方がやや高く評価されることから、自らを活動的で子供っぽいと捉え、理想的自己として落ち着いた、大人っぽい自分になりたいと考えていることが理解できる。

ついで4年生の「一般的望ましさ」「魅力」の因子をみると、理想的自己は「一般的望ましさ」の評価が高く、好きな被服は、「魅力」の評価が高い傾向を示している。そして「一般的望ましさ」、「魅力」のないイメージを与える被服は、最も嫌いな被服である。

一方「一般的望ましさ」「ファッション・個性」においては、各概念のばらつきが大きく、自己へあり方の違いが明確である。理想的自己は「一般的望ましさ」、「ファッション・個性」とともに正方向に布置しており、高く評価しているが、現実的自己は理想的自己に比べ、かなり低く評価している。これは、4年生がより社会的な立場や周囲の評価を気にかけている現れであり、社会から望ましいとされる人物を強く目指しているものと推察される。今後理想とする自己のイメージをより高く設定し、自分自身を常に成長させていきたいという意識が、1年生よりも強く表出することが確認できた。

### 3-2 自己概念と被服行動との関係

#### 3-2-1 被服行動による評価構造

自己概念に影響を及ぼす被服行動について検討を行うため、被服行動尺度15項目と被服関心度30項目を合わせ因子分析を行った。このとき1年生、4年生ともに共通性の低い4項目を削除して解析し、固有値1以上の解釈可能な因子を抽出した。4年生の結果を表2に示す。

第1因子は「最新のファッションを知るために多くの店を見る」「最新のファッションを着用するようにしている」「おきに入りの衣服を着ると自信が出る」など16項目で構成されており、「流行と心理安定性」の因子とした。第2因子は「人がその場に合わない衣服を着用しているのは見ていられない」「TPO 似合った服装を着用する」など9項目で構成され、「社会適応性」の因子とした。第3因子は「新しい衣服を購入するとき友人が着用しているものと似たものを買うようにする」など5項目で構成され、「同調性」の因子、第4因子は「お気に入りの衣服を着ている場合とそうでない場合では自分の気分や行動に違いを感じる」など5項目で構成され、「印象操作性」の因子、第5因子は「シャツのすそが出たり、汚れた衣服を着用していると気になる」など3項目で構成され、「対人外観性」の因子、第6因子は「生地風の合いに非常に敏感である」3項目で構成され、「快適性」の因子とした。第6因子までの累積寄与率は全分数中の49.52%であった。

また1年生は、「個性と心理安定性」「社会適応性」「流行性」「同調性」「対人外観性」の5因子で構築され、累積寄与率は45.18%であった。

この結果より、4年生は因子の評価構造が1年生よりも細分されており、被服行動に対する評価がやや複雑である。これは先の、理想的自己、現実的自己、好きな被服、嫌いな被服において確かめられた概念の差異が、評価構造の違いとなっていると考える。

#### 3-2-3 アイデンティティと理想的自己観

アイデンティティとは自己認識などとも言われ、アイデンティティが高い人ほど自己の



現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係

表2 被服行動による評価構造

(4年生)

因子名	因子負荷量	項 目	固有値	寄与率
流行と 心理安定性	0.819	最新のファッションを知るために多くの店を見る	8.19	18.21
	0.728	自分自身が着用したいと思わなくても、何が新しい流行の衣服なのか知りたい		
	0.693	ファッション雑誌をよく読む		
	0.630	最新のファッションを着用するようにしている。		
	0.620	自分自身を他人より個性的に見せるために流行している衣服を着用する		
	0.600	衣服だけでなく、かばんや靴、アクセサリーの組み合わせにもこだわる		
	0.536	最新のファッション街などを通るときは着用している衣服に気が抜けない		
	0.526	お気に入りの衣服を着ると、自信が出る		
	0.518	自分の気分を高めるために衣服を買う		
社会適応性	0.714	人がその場に合わない衣服を着用しているのは見ていられない	3.75	9.34
	0.681	TPOに合った服装を着用する		
	0.656	TPOにあった衣服は大切だと思う		
	0.582	出かける場所や相手によって着用する衣服を変える		
同調性	0.751	新しい衣服を購入するとき友人が着用しているものと似たものを買うようにする	2.88	7.40
	0.696	グループのなかで仲間意識を持つため、他人と同じような服装をする		
	0.683	一緒にいる友人と同じような雰囲気になりたい。		
	0.568	自分に似合わなくても、仲間の間で流行していたらその衣服を着用する		
印象操作性	0.681	お気に入りの衣服を着ている場合とそうでない場合では自分の気分や行動に違いを感じる	1.82	6.05
	0.502	衣服や髪型など全体のバランスがうまく調和するように心がけている		
対人外観性	0.629	シャツのすそが出たり、汚れた衣服を着用していると気になる	1.60	4.54
	0.602	自分に似合う服装がわかっている		
	0.572	他の人に不快感を与えるような衣服は着用しない		
快適性	0.656	生地風の合いに非常に敏感である	1.38	3.98
	0.593	衣服の肌触りは、重要である		

(表は因子負荷量が0.5以上となった項目を記述)

ことをよく理解しているが、アイデンティティの低い人ほど他人に左右されやすいため、自己を理解していない傾向にある。そこで8項目の平均値を算出し、1年生と4年生の項目間の差の検定を行った。表3に示す。

t検定の結果、6項目に有意差が確認できた。そして4年生は全体に1年生よりも高い評定平均を示し、自己の確立度が高いことが認められた。特に「今の自分が好きである」、「周りから受け入れられているという自己の存在感を持っている」「自分がどんな人間で何をやりたいかわかっている」については、4年生は中央値を示す3以上、1年生は3以下で、両者間の自己認識に差が生じた。

その要因として、1年生はアルバイトを行っている学生もあるが、授業を受ける、クラブやサークル活動をするといった友人を主体とした場面での行動が多い。これに対して4年生は就職活動、インターンシップなど社会に一歩足を踏み込んだ経験をしているためであると考ええる。

表3 アイデンティティ確立度に対する評定平均値とt検定による1・4年生の差

項 目	1 年 生	4 年 生	t 値	有意水準
自分の考えをしっかりと持っている	3.47	3.53	-0.51	
将来のはっきりした目標がある	3.44	3.57	-0.86	
今の自分が好きである	2.83	3.15	-2.62	※※
今の自分でよいという自己肯定感を持っている	2.55	2.93	-2.72	※※
これからもこのままの自分でやっていけるという自信がある	2.66	2.95	-2.29	※
周りから受け入れられているという自己の存在感を持っている	2.82	3.15	-2.95	※※
自分は社会にとって役に立っていると感じている	2.38	2.78	-3.43	※※※
自分がどんな人間で何をやりたいのかわかっている	2.84	3.21	-2.36	※

※※※0.1%有意 ※※1%有意 ※5%有意

### 3-2-4 理想的自己に近づくための方法

自己概念を調べた際、理想的自己は高い評価を示した。そこで現代の女子大学生はどのようにして理想的自己に近づこうとしているのかを調べた。結果の一部を図3に示す。

見た目の外見と、性格や能力などの内面のどちらを重視するかについては、1年生、4年生ともに外見よりも内面を重視している人は、80%近く存在し、外見ばかり気にしているのではなく、内面から魅力ある人物になりたいと考えている人が多いことがわかった。

理想的自己に近づくために重要視していることは、1年生が「衣服」「自分を見つめなおす」「スキルアップのための勉強をしている」であり、3項目を合わせると全体の52%を占めている。自己概念の調査を行った際、1年生は理想的自己に近づくため衣服の着用への関心が強く現われたが確認できたが、この回答にも「衣服」を重要視する傾向が明らかとなり、理想的自己に近づくためには欠かせない要素であるということを証明している。しかし「自分を見つめなおす」という内面についても、現在の自分自身から理想的自己に近づくためには必要な要素であると感じている。

4年生が最も重要視することは、「自分を見つめなおす」ことであり、理想的自己に近づくためには自己についての理解を深め、他者からのアドバイスも柔軟に受け入れる姿勢を持っていることが示唆された。そのためには「衣服」も理想的自己に近づくための要素であると回答しており、自己を見つめ直したうえで、自分に似合う、個性を引き出す衣服を着用したいと考えている様子が理解できる。

そして、実際に理想的自己に近づくために行っていることは、1年生が「自分が何をしたいかなどを考え直す」「衣服を買う」と回答し、先の重要視しようと考えている点と似た割合を示した。また「雑誌をたくさん読む」「メイクを研究する」とも回答しており、雑誌からの情報によって、理想的自己に近づこうとしているのかも知れない。

これに対し4年生は、「自分が何をしたいかなど考え直す」「スキルアップのため勉強している」の割合が高い。4年生になると自分自身を見つめ直し、自己の内面を理解して理想的自己に近づくためには何が重要であるかを考え、実際に行動に移していることが明らかとなった。こうしたことから1年生は理想的自己に向けて検討段階といえるが、4年生は実行段階であるといえる。



# 現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係

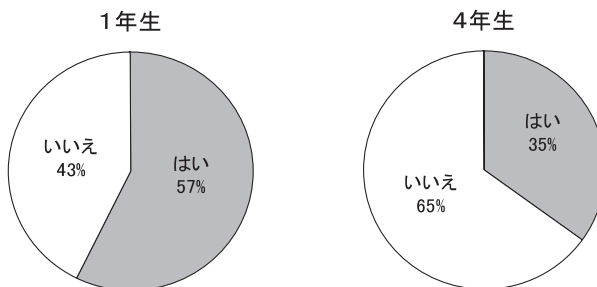
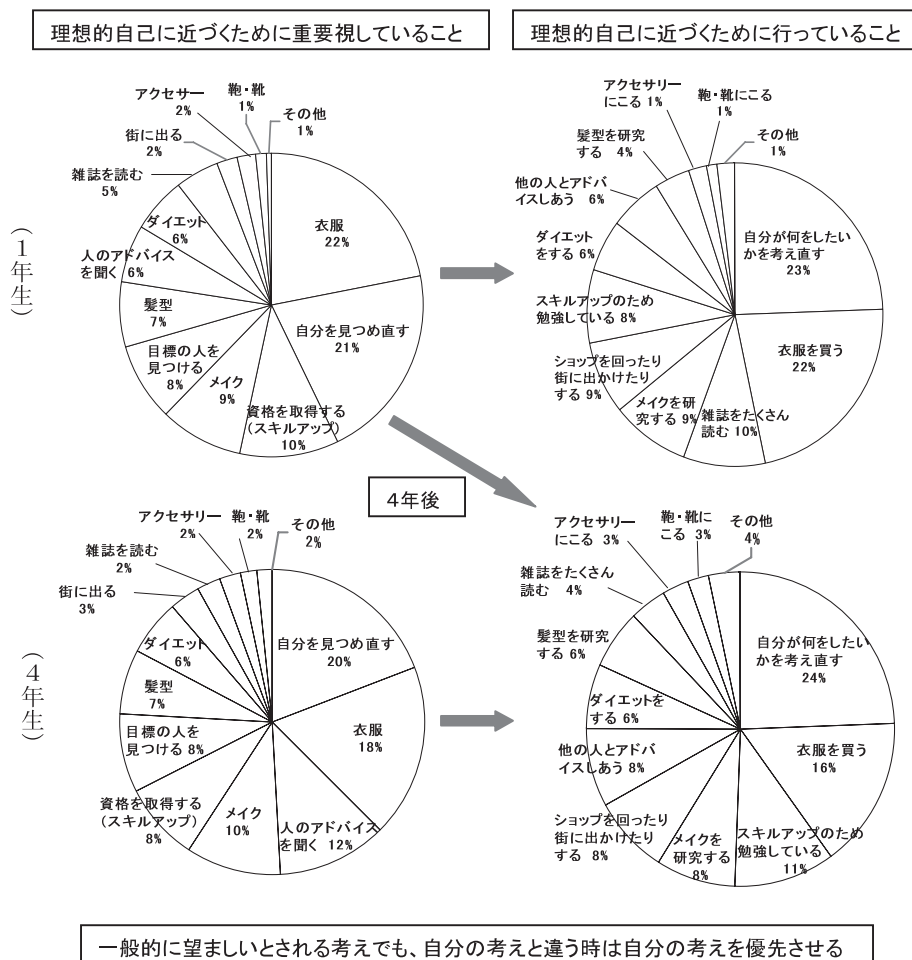


図3 理想的自己に近づくための方法

最後に、一般的に望ましいとされている考えでも、自分の考えと違うときは自分の考えを優先させるかどうかの質問には、1年生が「はい」57%「いいえ」43% 4年生が「はい」35%「いいえ」65%と回答し、反対の結果を示した。これは「一般的に望ましい」とされ

る考えと異なった際に、自分の考えを優先させようとする1年生と、周囲の意見を聞いて柔軟に対応しようとする4年生の考えの違いを確認にすることができた。こうした点が女子大学生の自己概念と被服行動に映し出されているといえる。

#### 4. ま と め

本研究は、現代女子大学生の自己概念を調査し、そこからどのような自己を呈示したいと考え、被服または被服以外のものによってどう理想的自己に近づけていこうとしているかを、大学生1年生と4年生を対象に考察した。

自己概念と被服イメージの関係をみるため、現実的自己、理想的自己、好きな被服、嫌いな被服について検討し因子分析した結果、1年生は見た目の美しさや清潔感を一般的望ましさと考えているのに対し、4年生は、落ち着きのある真面目なといった社会的に見た望ましさを重視していることがわかった。また、1年生は「ファッション性」「個性」「若さ」など外見の魅力への関心が高く、4年生は「魅力」「個性・ファッション」「快さ」など社会へ適応を考慮する傾向が認められた。因子空間に各概念を布置したところ、1年生は嫌いな被服、現実的自己、好きな被服、理想的自己と位置したが、4年生は各概念がばらつく傾向があり、被服以外にも自己を高めるための要因があるのではないかと推測された。

そこで自己概念に影響すると考える被服行動尺度、被服関心度と、アイデンティティ確立度、理想的自己に近づく方法について調べた。結果、被服行動尺度と関心度は1年生が5因子、4年生が6因子で構築された。両者ともに心理に関する因子が抽出され、好きな被服を着用することにより高揚感や自信を得ていることが明らかとなった。しかし、印象操作や衣服の快適性などについては違いがあり、4年生は多くのことに気配りをしている様子がうかがえた。

アイデンティティと理想的自己については、流行に敏感で自分の好きな被服を着用する傾向が強い1年生は、社会に対し一般的に望ましいとされる被服を選択、着用する4年生に比べ、全体にアイデンティティの確立度が低い傾向を示した。

そして、理想的自己に近づく方法として、1年生は衣服で表現することの他に、自分を見つめ直しスキルアップのための勉強を重視しているが行動には移していない。しかし4年生は行動に移し、理想的自己に近づこうと努力している様子が認められた。

本研究は、同大学に身をおく本学女子学生を対象に調査を行ったが、大学生の“入口”である1年生と“出口”である4年生では社会経験の違いにより行動や目標に差が生じていることが確認できた。これは、学生が4年の間に自分を見つめなおし内面を少しずつ変化させ自己概念を認識している証であり、これが被服行動に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

#### 参考文献

- 1) 安藤清志：見せる自分／見せない自分“自己呈示の社会心理学”，サイエンス社，1994
- 2) 藤原康晴他：被服心理学，日本繊維機械学会被服心理学研究分科会編，1988

現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係

- 3) 藤原康晴：女子大学生の被服の関心度と自己概念および自尊感情との関係，日本家政学会誌，37，493-499（1986）
- 4) 押山八重子：女子大学生の被服に関する態度と自己概念および性格特性との関連性，ノートルダム女子大学研究紀要，77-87（1992）
- 5) 藤原康晴：女子大生の好きな被服のイメージと自己概念との関連性，日本家政学会誌 38，593-598（1987）
- 6) 永野光朗：被服行動尺度の作成，繊維製品消費科学，35，468-473（1994）
- 7) 神山進：被服関心の概念とその測定——ギュレルの研究の追試——，繊維製品消費科学，24，35-39（1983）